絆

きずな

小杉健治

未

きずな

集英社

一九八七年六月五日　第一刷発行
一九八八年二月二九日　第五刷発行

定価は カバーに表示してあります。

著　者　小杉健治（こすぎけんじ）
装　丁　田村義也
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社
〒101　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　出版部（〇三）二三〇―六一〇〇
　　販売部（〇三）二三〇―六一七一
　　製作課（〇三）二三〇―六〇八〇
印刷所　共同印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取替え致します。
本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

©1987 K. KOSUGI, Printed in Japan　ISBN4 08 775100 7 C0093

猛き箱舟（上・下）　船戸与一

野望と挫折。友情と愛。そして、復讐の宴！　西の「モンテ＝クリスト伯」にも比すべき、国産冒険小説の輝ける金字塔!!　壮大なテーマを語り尽した、畢生の二〇〇〇枚、ここに完成。　各¥1000

夜を急ぐ者よ　佐々木譲

嵐の日、那覇。組織に追われて逃げてきた男。小さなホテルの経営者として、時に流されている女。十五年ぶりの邂逅。苦い恋の思い出。そして忍びよる魔の手。宿命の恋を描くサスペンス長篇。¥980

百舌の叫ぶ夜　逢坂剛

新宿歌舞伎町の爆発事件で妻を失った刑事と、記憶のすべてを失った男の宿命の対決。そしてその背後に隠された恐るべき陰謀。サスペンスの極限に挑戦する新直木賞作家の迫真の長篇。　¥980

リボルバー　佐藤正午

十七歳には十七歳の誇りがある。怒りも、そして殺意も。拳銃を拾った少年は、北へ。拳銃を失くした警官も、北へ。奇妙な味が全篇にただようサスペンス長篇。　¥980

悪人海岸探偵局　大沢在昌

俺の名前はキッスのシロー。でかい図体と腕っぷしに物をいわせて探偵稼業。幸い、ここは名うての悪人海岸、事件にこと欠くわけがない。ライト感覚のハードボイルド。連作長篇。　¥1000

ウェディングドレスはお待ちかね　赤川次郎

その結婚、ちょっと待ってください。あいつの狙いは、持参金、そして保険金。あなたは殺されます！ノンビリ姉貴と暗黒通りの妹が遭遇する恋と冒険とミステリー。　¥680

湖畔のテラス　赤川次郎

妻を裏切った夫は、どんな罰を受けるか、ご存知!?愛人と二人で湖畔のホテルを訪れた夫が受ける、妻のむごい仕打ち。表題作など、愛と嫉妬のミステリー六篇を収める。　¥750

大航海（上・下）　伴野朗

中国、明の初め、コロンブス、マゼランの大航海時代に先行すること九〇年、士卒二万七千、62隻の大船団を率いインドを経てアラビアへ。七度の大航海を成功させた奇跡の提督・鄭和の生涯。各¥980

岳物語（正・続）　椎名誠

彼の名は岳。あの椎名誠の息子である。父親よりもシーナ的であると言われている。これは、ショーネン・岳がまだ父親を見棄てていない頃のウツクシイ物語である。著者初の私小説。　各¥780

殺意のバカンス　野村正樹

疾走する新幹線の孤独な毒殺死体！　彼女が所持するのは、古ぼけてセピアがかったモノクロ写真。かすかな手がかりから影なき殺人者を追って、OL・加奈子の推理が始まる。書き下ろし長篇。¥1100

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

愚者の街　北方謙三

走り続けろ。果てしなきアスファルトのジャングルを。そして、斃れるものならば、野獣のように。青年の怒りと愚行、そして、野望。渇いた筆致の書き下ろしクライム・ノベル。　¥980

夜が傷つけた　北方謙三

かつて友のために闘った。燃える日々のために傷ついた。あの熱い血よ、蘇えれ！　傑作「眠りなき夜」の二人が、再びコンビを結成して、巨大な敵に挑む。書き下ろしハードボイルド長篇。　¥980

ふるえる爪　北方謙三

最初の男の時、弁護士になって弁護してやりたいと思った。そしていま、本当の恋をしているのか確かめるために、女はもう一度だけ賭ける、男に！　書き下ろしハードボイルド長篇。　¥980

夜よおまえは　北方謙三

異国に身を棄てた女。時に流されていく男。心の傷をひきずる二人が、スペインの裏街で邂逅する。影の地帯から光へ向かって駆け抜けろ！　男の慕情が滲む、書き下ろしハードボイルド長篇。　¥980

渇きの街　北方謙三

道ってやつは踏みはずすためにある。踏みはずしたところに、また道がある。気位。男の誇り。そいつが高志に平坦な道を進ませない。推理作家協会賞受賞の書き下ろしクライム・ノベル。　¥980

定価は改定されることがあります

駅

森村誠一

無数の人々が去来し、それぞれの人生の断片を残していく、大都会の巨大な駅。そこに繰り広げられるサスペンスフルな人間ドラマ。構想二〇年、書き下ろし本格ミステリー長篇。　¥980

珊瑚色ラプソディ

岡嶋二人

婚約者の記憶から欠落した空白の二日間。そして、その友人の失踪。南国の海は何を隠すのか？　エメラルド・グリーンの海だけが知る秘密に挑むサスペンスフルな長篇ミステリー。　¥980

サテンのマーメイド

島田荘司

二五〇マイル離れた二つの街で、同じ男が轢き殺された!?　雨のアメリカ西海岸を舞台に、ハードボイルド探偵が挑む本格トリック!!　新しい地平を切り拓いた書き下ろし長篇。　¥880

漱石と倫敦ミイラ殺人事件

島田荘司

一夜にしてミイラ化した死体。口にくわえた紙片には無気味な東洋文字。依頼をうけたシャーロック・ホームズは留学生、夏目金之助とともに怪奇な謎に挑む。鬼才の本格パスティッシュ長篇。　¥880

だれもがポオを愛していた

平石貴樹

エドガー・アラン・ポオゆかりの地ボルティモア。日系富豪の邸に起る猟奇連続殺人は、あたかも『アッシャー家の崩壊』や『黒猫』を再現したかのようだった！　推理ファン必読の本格長篇。¥1100

絆（きずな）

開廷時間まで、すこし間があった。
私は地裁の記者クラブから法廷にむかった。法廷前の廊下には廷吏の姿しかなかった。傍聴人はすでに入廷したようだった。
傍聴席の扉をおした。法廷に入ると、まっさきに被告人席に目をやった。この裁判の主役である被告人は、まだ姿をあらわしていなかった。
傍聴席の右半分の最前列と二列目まで、腕章をまいた新聞記者が占めている。私は最前列のあいている席に腰をおろした。
一段高い正面の裁判官席にもその主の姿はなかった。裁判官席の手前には、書記官と速記官がすでに腰をおろしていた。正面に向かって左側の検察官席にはふたりの公判検事。右手の弁護人席には弁護士がひとり、開廷を待ちかまえていた。
首をまわして傍聴席をながめまわした。
最前列の左奥のほうに、眼鏡をかけた紺の背広姿の男がいる。被告人の弟の市橋晴彦である。晴彦からすこし離れた位置に、被害者の会社の人間が数名いた。

昭和六十一年十月末――。

俳句の季語にある、冬隣、つまり冬近しを思わすような陽気だった。まだ冬というわけではないが、朝晩の寒さは冷えびえと肌に感じる。それでも、陽が高くなるにしたがい温かくなってくる。

イチョウの黄葉は太陽にかがやき、樹の周囲には実を落としている。空はすきとおるように青く、つめたい風は樹木をふるわせていた。

各地で、菊人形展が催され、浅草の観音様の境内では菊の品評会がひらかれている。街行く人びとの顔には、厳冬をむかえるきびしさは、まだないが、それでも季節の早い変化にとまどいを感じているようだった。

東京霞が関にある裁判所の合同庁舎ビルの窓ガラスに、晩秋の陽差しが反射している。一見、裁判所とは思えない近代的な建物に、高等裁判所と地方裁判所、そして簡易裁判所がある。

ここ東京地裁の四階の第四一二号法廷では、これから一人の女性が殺人罪で裁かれようとしている。事件は、『夫殺し』である。

しかし、この悲惨な事件も、毎日のように新聞紙上をにぎわす凶悪事件の前には色あせてしまうようだ。この『夫殺し』をありふれた殺人事件と表現するよりほかにないことじたいが異常なのだろうが、それほど司法記者として私の目にはさまざまな事件が、それこそ所を変え品を変え、あとからあとから量産され目の前にさし出されてくるのだった。

最近の事件でいえば、妻と愛人が共謀して夫を殺害した保険金殺人、高校の教師が教え子のＯＬを殺害した事件。わが子をせっかんして殺した事件など。数えあげたら切りがない。さらに、保険金目当てに父親が実の娘を殺すなどという事件を前にしては、この『夫殺し』も並の事件でしかないのかもしれない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

毎朝新聞七月十八日付け朝刊。
〔麻布で会社社長殺される！〕

この時点では、警察は強盗殺人という見方をしていた。しかし、一週間後の二十五日付け朝刊は、つぎのような見出しで世間の興味をひいたのである。
〔麻布の強盗殺人は妻の犯行と断定〕

社長夫人が逮捕された当時、テレビのモーニングショーは連日のようにこのニュースを扱った。葬儀の席の喪服姿の貞淑な未亡人と、逮捕されたふてぶてしい女の顔の落差を、テレビはより誇張して視聴者に伝えつづけたのだった。

だが、事件発生から約三カ月がたった現在、この事件をどのくらいの人びとが覚えているだろうか。めまぐるしく量産される事件は、人びとを一カ所にとどめておく余裕をあたえなかった。被疑者が警察に逮捕された時点で、人びとは、その事件を、自分のなかでいちおう解決させている。

しかし、被疑者にとっては逮捕された時点からが新たな闘いなのだ。裁判というのは、事件の衝撃が過去のものになり、世間の関心が薄らいだときになってから、ひっそりとはじまるものであった。

それでも、きょうは初公判ということもあってか、傍聴人の数も多いようだった。それより、記者連中がおおぜい傍聴席を占領していることに驚かされるにちがいない。まるで有名事件の裁判と見まがうほどだからだ。

妻が犯行を否認しており、ひょっとしたら冤罪事件ではないかという期待があるのならともかく、被告人はすなおに犯行を供述しており、裁判の争点は情状酌量の弁護になるだろうと予想されている。

死刑か無罪か、そのようなスリリングな展開がはじめから期待される裁判ではないのだ。それにもかかわらず、記者連中が熱い視線を投げかけているのはなぜであろうか。

じつは、司法記者連中がこの裁判に関心をもったのには大きな理由があった。それは、事件そのものより弁護人のことであった。

はじめ、この被告人、弓丘奈緒子の弁護人は東京弁護士会の水木邦夫弁護士であった。

水木が、被告人の実弟、市橋晴彦の依頼によって弁護人になったのが、被告人の逮捕直後のことだから、七月末のことである。以来、水木弁護士は被告人のために精力的に動きまわることになる。

ところが、一カ月半たった九月のはじめ、水木弁護士は突然、辞任したのである。

水木弁護士は、コンピュータ技術者から弁護士になったという変わり種だが、情熱的な少壮弁護士である。国選弁護を中心に活動しているせいか、地味で無名であるが、一部では評価されている。

だが、私たちを驚かせたのは、水木が弁護人をおりたことだけではなかった。後任の弁護人に原島保の名前がでたことだった。

原島弁護士に代わった理由を、記者連中は、市橋晴彦に質問したことがある。

「水木先生の意向です。原島先生のほうが姉の弁護にむいている、とおっしゃったのです」

慎重な物言いで、彼はこう答えたのである。私は、その言葉を聞いたとき、思わず耳を疑った。とっさに、晴彦の言葉を理解できなかったのだ。

原島の名前に、記者連中が色めきたったことにはわけがある。それは、原島が、三年前の『小岩母娘殺害事件』の弁護を最後に、弁護士生活から足をあらい、その後、姿を消していた人間だからである。

引退した原島が、なぜふたたび、弁護士に復活し、弓丘奈緒子の弁護をひき受けるようになったの

か。
私は、水木弁護士にあたった。
「原島さんは有能な弁護士ですよ。あのような人を野においておくのはもったいない。そう思ったから、弁護士への復帰をすすめたのです」
と、水木はあっさり言った。
そのころ、原島は亡くなった奥さんの実家の近くに住み、畑仕事をしてのんびり暮らしていたそうである。その暮らしぶりを聞けば、弁護士に復帰する気持など、毛頭もなかったと言えるだろう。ところが、信州の浅間山の麓にある村に、水木は何度も足を運んだのである。
私には、浅間山を背景にふたりの男の気迫が、はげしくぶつかりあった姿を想像するにかたくない。なぜ、原島はいったん捨てた弁護士の道にカムバックしたのか。原島の心を推しはかることはできない。そして、水木がどのような説得をくりかえしたのか、水木の口から聞くこともできなかった。
いずれにしても、水木弁護士の執念が、原島をふたたび、弁護士として法廷にひっぱり出したのである。弁護士会への再登録には二名の推薦人が必要なため、水木は先輩弁護士を説得し、推薦人になってもらった。そして、原島は弁護士会の承認をえて、この九月に弁護士に復活したのである。なぜ、水木はそこまでしたのだろうか。
「あの事件は、私では荷が重過ぎるんですよ。原島さんでなければ、被告人を救うことはできません。原島さんは、自分の奥さんと娘さんをひき殺した男のために、弁護を買ってでたほどの人です。能力を高く評価されながら、弁護ミスをしたということでみずから弁護士をやめられた。そういった波瀾にとんだ人生を体験し、人間的にもスケールの大きな方なんです、あの被告人を救えるのは原島さんしかいません」

原島弁護士が有能であることは、私もよく知っているつもりだ。T大法学部卒で二十二歳で司法試験に合格。司法修習生時代はつねにトップクラスの成績だったらしい。だが、三年前の小岩母娘殺害事件の第二審の裁判で、結果的に彼は過ちをおかしているのだ。それに、第一線を退いてから三年。いったん引退した弁護士に、どこまで被告人のために闘う情熱が残されているだろうか。

私は水木弁護士の態度を職場放棄ではないかと思った。たとえ、どんな理由があろうと、いったんひき受けた弁護をみずから放棄することは許せない思いだったのだ。もし、百歩譲って、原島弁護士の力が必要なら、なぜ共同弁護人にならなかったのか。被告人のためを思うのなら、水木と原島の二人で弁護をすればよかったのではないか。これまで、彼に見てきた弁護士の理想像をくつがえされる思いだったのだ。

これは私ひとりの感想ではなく、多くの記者仲間の思いだった。

このように、不可解な点が多いが、原島弁護士が弁護人になるまでの経緯から、司法記者連中はこの裁判でなにかが起きるという期待をもったのである。

しかし、私には彼らとは別に、もうひとつ、この事件にのめり込む大きな理由があった。

〔殺人事件。被告人、弓丘奈緒子〕

この第四一二号法廷の外の廊下にかかげられている掲示板の裁判内容である。この弓丘奈緒子は、私が中学生のころにあこがれていた女性だった。

夫殺しの犯人として、新聞に彼女の名前が出たとき、まさか、あの市橋奈緒子だとは気づかなかった。

〔社長夫人を逮捕！〕

それは、煽情的な見出しで、私の目にとびこんできたのだ。

七月十七日夜、九時半ごろ、西麻布にある弓丘産業社長方に強盗が侵入し、ひとりで在宅していた主人の弓丘勇一が強盗に腹部を鋭利な刃物で刺されて殺された。

しかし、この強盗殺人事件は一週間後に急転回した。警察は妻による強盗に見せかけた殺人と断定し、妻の奈緒子を逮捕したのである。

夫殺しの容疑で、所轄署は妻の取調べを開始したが、彼女は当初、犯行を否認した。事件の夜、外出していたと主張したのである。しかし、警察のアリバイ追及のまえに、妻の偽装工作はかんたんに露顕し、ついに、すべてを自白したのである。

以降、彼女は、検察官のまえでも、警察での供述をくり返している。

彼女は起訴後も一貫して罪をみとめてきた。しかし、初公判では一転して無実を主張するのではないかというわずかな期待があったのだ。それは、原島弁護士が弁護人になったことでなにかが起こるのではないか、という期待でもあった。

しかし、われわれの期待をよそに、検察官席の二人の検事は、ときたま顔を寄せあい、白い歯を見せている。公判にのぞむ自信と余裕がうかがえるのだ。東京地検の鬼検事と言われる金沢検事と、若手の村岡検事であった。

金沢検事は、四十四歳になったばかりである。眼鏡の奥に切れ長の細い目がある。自信というものが、彼の全体をつつみこんでいるようであった。

ふたりの前の机の上には、書類が高くつまれている。みな、奈緒子を有罪にするための資料だ。

検察官のおちついた笑顔にひきかえ、弁護人席の原島は腕組みをし目を閉じ、じっとしていた。濃い眉をよせた表情から苦悶の色は隠せなかった。まるで、負けるとわかっている戦に出る武将のようであった。それは、彼の三年間のブランクとあいまって、私をいっそう不安にし、そして、いらだた

せた。
ひざに置いたメモ用紙、右手に持った鉛筆を、私は複雑な気持で見つめた。この手が、裁判をとおしてあきらかにされる奈緒子の秘密を記録していくのである。
腕時計に目をやった。九時五十八分。開廷まで、あと二分を残すだけとなった。うしろをふり返った。傍聴席はほぼうまっていた。弓丘、いや、私にとっては市橋奈緒子が、このようなたくさんの目の前でさらし者になるのか、と思うとたまらなかった。立ちあがり大声をだし、傍聴人を追っぱらいたい思いにかられた。
そのとき、裁判官席の横手の扉が開き、女性刑務官があらわれた。私は体をおこし、先導する刑務官の背後に視線をむけた。
背の高い女性刑務官に連れられて、被告人が入廷してきた。
うつむき加減で、ゆっくり彼女は入ってきた。黒っぽいセーターとあい色のスカート姿だった。両手を前にしている。そこに、手錠がかけられ、腰縄がまわされていた。
被告人席の前で、彼女は手錠をはずされた。化粧をほとんどしていないせいか、青白い顔だった。しかし、短い髪型で、三十過ぎにしか見えない若々しい顔である。
彼女は、女性刑務官に両端をはさまれて被告人席に腰をおろした。腰をおろすときも傍聴席には目をやろうとしなかった。
私のすわっている最前列の記者席からは、ちょうど被告人席がまっすぐ見とおせる。被告人席にすわった奈緒子の横顔が真正面にとらえることができるのだ。
市橋奈緒子が夫殺しで起訴されたあと、私は水木弁護士、さらに原島弁護士にも彼女との面会をたのんだ。しかし、水木も原島も、マスコミに対して極度に神経質になっていた。事件報道に対して批

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com